

When I first heard that I would be living on Sado Island, I was a little disappointed. All I knew about the place is that Sado was an island where Japan used to send its exiles. I didn't want to be an exile. However, one of the ALTs already living here informed me that I would be living in a town called Hamochi. The ALT described Hamochi as a town nestled into a leafy valley. As I read this description, I looked out the window of the apartment where I was currently living and noticed (not for the first time) that the things I saw were more urban and industrial rather than leafy. And I thought, maybe Sado won't be so bad after all. From then on my opinion and love of Sado has grown every day.

The first day of my stay on Sado will always be the image that comes to mind when some asks me about where I live. My first visual impression came from the Jet-foil taking me from Niigata to Ryotsu. Sado was green. There was significantly less grey than other places I had seen in Japan. The drive from Ryotsu took me across the middle of the island, with its seemingly endless rice fields, along the coast and through the narrow meandering roads to my new home. I could see the entire town as we drove down the mountain side. And it was indeed leafy.

Since that first day Sado has given me many things to love about it along with a few disappointments. Various guidebooks say that Sado is one of the last relatively untouched parts of Japan (meaning it's not covered in concrete). They're right about that. Everywhere you look there are trees and grasses and flowers and living things. Sado also has a great culture for the arts: Noh, the Kodo drummers and oni-daiko, the Sado-okesa. I have met artists of all types in my short time here: painters, potters, wood-workers, and glass-blowers (just to name a few). The people here have also been a pleasant surprise. I was expecting the people on Sado to be a little weary of foreigners; this has not been the case. The people of Sado, and Hamochi in particular, have been extremely kind and welcoming.

I could go on for much longer, but my space is limited. So, I'll end with this: Sado is a place that I am proud to call home.

佐渡島に住むことになるのと初めて聞いたとき、少し落ち込みました。佐渡について知っていることといえば、昔、流刑人の島だったということぐらいだからです。私は、島流しになりたくないと思っていました。そんな中、佐渡で暮らしているALTの一人が、私は羽茂という町に住むことになるかと教えてくれました。そのALTによると、羽茂は、緑の多い山に囲まれた町との事。それを聞いて、私は、住んでいたアパートの窓の外を見ながら、改めて思いました。緑が多いとは言えない、都会的で産業的な風景だなーと。そして、佐渡はそんなに悪いところではないのかもしれないと考え直しました。それ以来、私の中の佐渡への印象は良くなり、日に日に期待が大きくなっていきました。

今住んでいる所について、聞かれたら、初めて佐渡へ来た日のイメージが、常に思い浮かびます。初めに目に入ってきたのは、新潟港から両津港までのジェットフォイルからの風景。佐渡は緑色でした。日本で見たどの場所よりも、灰色がはるかに少なかったのです。両津港からは、どこまでも続く田んぼの風景を眺めながら、車で佐渡の真ん中を横断し、海岸沿いを通り、狭く曲がりくねった道をぬって、私の住む家にたどり着きました。山を降りて行くにつれて、町全体を見渡すことができましたが、本当に緑豊かな風景でした。

佐渡での生活が始まり、少しは落ち込むこともありましたが、多くの出来事、私は、佐渡が好きになっていきました。たいていのガイドブックには、佐渡は、日本で比較的手の加えられていない地域(つまり、コンクリートで覆われていないという意味)の一つだと書かれています。まさにその通りで、至る所に、木や草花、生き物を見ることができました。佐渡には、能や鼓童、鬼太鼓、佐渡おけさ、すばらしい芸能文化も存在します。ここにいる短期間、画家や陶芸家、木工職人にガラス職人と、いろいろなタイプの芸術家に出会いました。みんな、驚きながらも感じの良い対応してくれました。佐渡の人達は、外国人に少々うんざりしているのかと思っていただけ、それは、嘘でした。佐渡、特に羽茂の人達は、本当に親切で、歓迎してくれます。

もっと続けたいのですが、スペースに限りがあるので、この辺で… 最後、この言葉で終わりたいと思います。

—佐渡は、故郷と呼んで誇れる場所—



## 第43回 東京両津の会総会

4月10日(日)桜満開の清々しい日、東京都「アルカディア市ヶ谷」に会員約100名が集い総会が行われました。渡辺恵美会長があいさつし、高野市長をはじめ来賓の方々への祝辞の後、議事に移り事業報告等すべての議題が承認されました。

総会終了後、初お披露目となる東京新潟県人会おけさ同好会による「両津甚句」で懇親会がスタートしました。和やかな雰囲気の中、会員はときを忘れ合併後のふるさと佐渡への思いや、近況等を語り合い、「ふるさと」を大合唱し、来年の再会を約束し会は終了しました。

## 第23回 関東畑野会総会

5月15日(日)東京「上野精養軒」を会場に、川村敏夫会長をはじめ大勢の会員の出席により、第23回関東畑野会総会が開催されました。

鏡開きの後の懇親会では、栗野江鬼太鼓保存会による勇壮な鬼太鼓の熱演に、会場から歓声が大いに飛び交いました。佐渡おけさ踊りでは、



会員の皆さんが次々と踊りに加わって大きな輪を作る一幕もあり、懐かしいふるさとの芸能を存分に楽しんでいました。

佐渡市からは親松助役をはじめ畑野地区出身の議会議員の方々も参加し、会員の皆さんとの親ぼくを深めて来ました。お土産としてお渡しした佐渡海洋深層水の塩とにがりのセットは大変喜ばれました。また、会場では特産品販売コーナーが人気を呼ぶなど好評のうちに幕を閉じました。

## 第52回 東京相川会大会

5月22日(日)東京都 すみだリバーサイドホールに会員が約200人出席して行われました。総会は原田佑三郎会長のあいさつの後、衆議院議員近藤基彦氏や市長代理で親松助役等の祝辞の後、引き続き事業報告等が行われすべての議題が了承されました。

総会終了後懇親会が開催され、若波会等によるアトラクションの後、佐渡おけさの輪踊りに大勢が参加し盛況に行われました。参加された会員は、年に一度相川弁で話しができ、郷土の話題に触れる機会として楽しみにしているとのことでした。別れを惜しみながら、今後も大会を続けていくことを誓い合って解散しました。

